

梁啓超の『新中国未来記』について

—兆民の『三酔人経綸問答』と対照させて—

王 閏梅

キーワード 伝統と近代、中国伝統思想、西洋近代思想、近代国家、議論

1、はじめに

戊戌政変後に梁啓超は日本に亡命し、ここで日本語で書かれた資料を通して本格的に西洋思想に触れ、吸収した。彼は1901年から1903年までの間にホッブス、スピノザ、ルソー、モンテスキュー、ベーコン、デカルト、カント、ベンサムというまさに西洋近代思想の中心部分を覆う思想家論を発表した。これらの原テキストとして梁啓超は中江兆民の『理学沿革史』に大いに依拠していたことが、宮村の研究ですでに明らかにされている。¹宮村はこの論文のむすびに、梁啓超が『理学沿革史』と出会ってからの思想活動に兆民との興味深い対応を発見することができるかと述べている。そして、梁の『新中国未来記』と兆民の『三酔人経綸問答』に言及し、「兆民の場合も梁啓超の場合も、西洋思想との出会いを介して自国の現実と正面から向き合おうとしたとき、『問答体』としてしか表現しようのない深いディレンマに対峙せざるをえなかったという意味で、それは興味深い思想的対応を示していると考えられる」²と、この問題の更なる探究の可能性を示唆している。今回は宮村のこの示唆を念頭におきながら、『新中国未来記』に焦点を当てて考察を進めたいと思う。

梁啓超は中国の直面する問題によりよい解決法を見つけるため、さまざまに逡巡した。1902年10月から半年以上をかけて発表した政治小説『新中国未来記』がその迷いを示す典型例の一つである。彼はこの小説を発表するために雑誌『新小説』を創刊するほどの意気込みをみせた。小説の内容は、フランス留学経験をもつルソー思想の信奉者「李去病」と、ドイツに留学して「国家学」に啓発された「黄克強」との間で展開される中国の将来の進路をめぐる議論が、60年後の中国を舞台に「孔覚民」という老博士の口を通して回想されていくものである。この議論には梁が一連の西洋思想家論で論じた様々な思想的対立が反映されている。

梁の15年前に、中江兆民は『三酔人経綸問答』を著し、「東洋豪傑」、「洋学紳

士]、「南海先生」の三人を登場させて、1880年代終わりに際して日本の取るべき進路について議論させている。兆民はこの議論に結末を与えていないが、これと対照的に、梁啓超の『新中国未来記』では、そこに描かれた近未来の時代設定から、彼の意図した中国のとるべき進路が読みとれる。またこの結論をもって梁は後に『新民叢報』で論陣を張り、『民報』と一連の論争を展開した。

このように、西洋思想を吸収、消化した日中の思想家が記した政治小説に見られる共通点と相違点に注目し、東アジアの近代化が抱えていた問題を比較、考察したい。

政治小説『新中国未来記』は全五回からなる未完の作であるが、後日まとめられた梁の文集『飲冰室專集』には第四回までしか収録されていない。つまり、第五回は梁啓超にとって自作とは認めたくない作品だったのである。³ここではその内容が梁啓超の政治理念の方向と緊密に関わる第一、二、三回を考察の対象とする。

2、時代背景

まず、『新中国未来記』が書かれた1902年あたりの時代背景に注目してみよう。当時の時代情勢は、義和団事件で1900年に八国連合軍が北京に侵入し、中国を瓜分する西洋列強の勢いが激しくなる一方であった。国の様々な地域が外国の勢力範囲に陥り、東北三省がロシアに占領され、なお南へ拡大される一方の勢いであった。官僚の腐敗は深刻な状況に達し、内には人民圧迫の限りを尽くし、外へは各国に最大限の媚を売る。この状況を小説中の李の言葉で語れば、「中国はまさに30年掃除をしていない牛小屋のようで、中の糞尿が測り知れないほど厚い」という有様であった。清朝政府の暴政に対し、各地で暴動が相次ぎ、「反清復明」の種族革命スローガンをかかげる秘密結社=会党をベースとする会党武装蜂起や清朝要人の暗殺を目指す個人テロルなど、武力によって清朝を倒そうとする活動が盛んだった。経済状況については、もともとひどい状態であるのに加えて、1901年の辛丑条約調印によって、高額な賠償金を払わされ、清朝の経済はすでに崩壊の瀬戸際にあった。この状況はグローバル化しつつある近代的経済活動に影響され、さらに悪化する傾向を強めていた。このことについて梁啓超は李の口を通して次のように述べている。

これからの中国の争乱は、今のひどさよりも十倍以上になるに違いない。それも、あの増税や苛斂誅求こそが、乱の大原因なのである。それに、例

の経済問題というのがある。これは全世界的に大きな波動から巻き起こされ、やってきたものである。もう八年、十年も経つと、わが国では「民は、生を聊まず」という状況に陥るでしょう（第三回、駁論21）。

こうした状況から国を救おうという動きも活発化し、梁啓超がこの小説を記した1902年あたりの状況は以下のように記されている。

わが国が光緒壬寅（1902年）以前、民間志士の多くが会を起り、救国を図りました。北京に強学会、保国会あり、湖南に南学会などがあります。……その後保皇会が海外で興り、その呼びかけに応じた都市は百以上、その氣勢はもっとも盛んでありました。その他、革命の会も各地に次から次へと立ち上がり、それにまた、早く明末以来の秘密結社というものもあります。哥老会、三合会、三点会、大刀会、小刀会など名前が多くあります。これらはみな頑迷で腐敗してはいましたが、しかし実に大きな団体で、かすかに一国に匹敵する潜勢力をもっていたのです。革命党もその中で運動し徐々に改良を図っていました（第二回）。

これとは対照的に、兆民の『三酔人経綸問答』は全く異なる状況で書かれた作品である。この作品は明治20年（1887年）5月に、集成社から出版された。その背景として、以下の点が挙げられる。

まずは明治10年の西南戦争が鎮圧されたことで、明治政府に対する不平士族の武力による反乱の終焉を迎える。これで武力によって明治政府に反し政権を取ろうとする運動はなくなったが、同時にさまざまな政論が盛んになり、自由民権運動が台頭し激化する。また、欧化主義の流れも挙げられなければならない。明治19年5月1日、井上外相は東京で列国協同の条約改正会議を開催した。20年に至り、「裁判管轄条約案」が議定された。そして、この秘密交渉のプロセスと並行して、条約改正実現のための方略と称する、いわゆる「鹿鳴館の欧化主義」が現出したのである。

つまり、『三酔人経綸問答』は兆民が激しい政治的変動期を経て、日本の方向性が見え始めた時期に、一つの纏めとして書かれたものでもあるのに対し、『新中国未来記』は、梁が混沌とした中国の未来について政治抱負を示すものとして書かれたのである。

3、小説に描かれた理想像

梁啓超は『新中国未来記』の緒言に「余この書を著さんと欲して、茲に五年なり」と述べている。つまり戊戌変法を開始する以前から既に中国のあるべき姿を構想し始めていたわけである。彼がこの小説に描いた60年後の中国像は、維新が成功し、新しい国家が建設されたことを示している。

小説の時代背景は、雑誌の発行された1902年から60年後の1962年正月1日。ただし、作品の中の年号には百年繰り下げた西暦⁴と康有為の提唱した孔子紀元が使用されており、この年は西暦2002年、「孔子降誕二千五百十三年」である。それは全国人民が「維新五十年大祝典」を挙げる日で、おりしも「万国太平洋會議（国際平和會議）」が開催されるため、各国の全権大使が南京に集合している。

このような時代設定から逆算すれば、作者の描く1912年の中国はすでに維新を実現していることになる。

4、理想像へ辿り着くためのプロセス

梁啓超は当時から60年後の時点に立ち、そこに辿り着くまでのプロセスを回想する形で小説を展開するが、第二回において、回想者である老博士・孔覚民はこの間の歴史を六段階に分けている（下線は引用者が加えたもの）。

- 第一：準備時代、八カ国連合軍の北京侵入から広東における自治まで
- 第二：分治時代、南の各省の自治から全国国会の開設が実現するまで
- 第三：統一時代、初代大統領羅在田（批者いわく、この方は誰だ。著者いわく、『魏書』孝文帝本紀を読めば、この姓の生まれたいわれがわかる）の就任から第二代大統領黄克強の任期を終えるまで
- 第四：殖産時代、黄克強の第三代大統領就任から第五代大統領陳法堯の任期を終えるまで
- 第五：対外競争時代、中露戦争から、アジア各国の同盟会成立するまで
- 第六：雄飛時代、ハンガリー会議以後から今日まで

羅在田の後ろに梁が注を入れているので、この名が北魏の孝文帝⁵を示唆していることが分かる。つまり、羅は光緒帝の姓である愛新覚羅、在田（zàitián）はその載活（zàitián）という名を同音の漢字に置き換えたものであり、これに

については既に指摘されている。⁶ 羅の大統領就任は共和制の成立を意味すると考えられるが、ここには梁啓超の複雑な思いが窺える。小説の次の部分を見てみよう。

……その二、民間の志士が国のために身を忘れ、ついに大業を成したこと、その三、前皇帝が英明で、よく時勢を洞察せられ、群議を排除し政権を民にお譲りになったこと。この三つのことは、……中でも第二のものこそ、全篇の眼目なのであります。……当時の志士が、みな中国が立憲政体をとることを望み、あくまでその成立を期したので、それでお互いに同盟してこの党を結成しました。……一国の政治改革、党会の力によらなければ出来ないであります。この憲政党はそれ以前の一切の民党の総括であると同時に、それ以後の一切の政党の源であります。もしこの党がなければ恐らく中国は絶対分治、統一、いわんやその他のことなどの大事業を成し遂げることは絶対不可能であったでしょう（第二回）。

つまり、梁のいう維新は皇帝の自発的退位によって成立したものである。「此の時点での梁の理想は、すでに立憲君主制ではなく、共和制の採用であったことが判明する」⁷との指摘があるが、これは「梁の理想」というより、このような歴史区分に応じてそれぞれの段階に相応しい政治システムが必要だという彼の政治理念に基づいた判断であると言ってよいかもしれない。上の引用からも、彼が憲政党に託した大きな役割は主に分治 → 統一の両期を完成させることにあったと考えられる。そして維新後に、さらにまたそれに新しい課題を担わせるのである。⁸ 第二回では主として立憲期成同盟党（憲政党と略称）結成の由来と実践要綱が示され、その歴史上の功績が顕彰される。つまり、作者梁啓超にとって、憲政党は彼が当時何よりも実際に組織したいと考えていた理想の政党であったと思われる。それゆえ、小説の第三回では主人公の二人に国家の将来に関して四十数回にわたる議論をさせている。フランスやアメリカの革命を理想とする李去病と、立憲君主制を目指す黄克強の意見が真っ向から対立し、容易に一致点を見出せない。最後に黄が「結論」としてまとめたのは、「全国の志士と連絡し、全国の国民を訓練し、事をなすときが来たならば、臨機応変にやるしかないのであって、ただ、万やむを得ざる場合のほかは、決して軽々しく暴力の道には進まない」という折衷的な意見で、李も結局賛成した。この部分からも維新成功前の段階においては、立憲君主制の成立がやはり梁の本当の夢であったと考えてよいだろう。

この歴史区分から、維新を成功させるには第一の準備時代と第二の分治時代

というプロセスを踏まなければならないという梁の主張が読み取れる。またそれは武力によって旧政権を打倒することではなく、平和的に移行するものである。さらに、立憲君主制を目指した黄が三代続けて大統領に就任し殖産時代を築くという設定から、梁啓超が殖産時代に大きな役割を担わせていることが分かる。近代化のプロセスには経済的要素が極めて重要なポイントであり、中国を列強の脅威から脱出させるためには経済的発展が不可欠であるという彼の認識がここによく現れている。そのためにこそこの平和的移行が梁の構想の中で重要な位置を占めるのである。梁は、対外競争時代と雄飛時代に入る前段階として、殖産時代がなければならず、そこでの富の蓄積を重視していた。つまり、近代的インフラを整備せずに、近代的国家システムだけを造り上げても列強に対し本当の意味での主権を獲得できないからである。そこで、この重責を黄克強に負わせ、黄の後任としてさらに陳法堯を登場させた。「堯に倣う」という名前が暗示するように、この人物は殖産時代をもう一歩前進させる。それによって、国力を増し、国が順調発展の軌道に乗り、その後は自然に対外競争時代と雄飛時代に入るということになる。

梁啓超は「生計学学説沿革小史」では、生計学（経済学）が今日の世界を動かし、国勢を左右する重要な学問であることを強調し、国家が経済発展を重視する時代の到来を述べている。⁹彼は近代国家が政治と経済とを緊密に関係してきたことを認識しながら、それを如何に自国の政治活動に植えていくかについて深刻に悩んでいた。それは彼がeconomyという概念の翻訳に困難を感じたことから裏付けることができる。彼は当時日本ですでに定着していた「経済」という訳語に違和感を覚え、その代用語をいくつも試していたが、晩年まで、使わざるを得ない場合を除いて「生計」を用いた。それで「経済」の二文字を日本からそのまま借用して不安に思う理由として、意味が西洋語の原意とすれ違いがあるほかに、「この名は中国であまりにも通行して、学者の目を混じやすい」¹⁰ことをあげている。

このプロセスを念頭において梁啓超が小説に示した具体策を探ってみよう。

5、新中国の創設を成功させる具体策

5.1 人物設定

梁が新中国の創設を成功させるために小説に登場させた時代をリードする人物とその思想的履歴を見てみよう。

主人公の黄克強（字は毅伯）と李去病は清末の大儒朱九江の高弟であった黄

群の息子と弟子である。黄群は陸王理学¹¹の学問を研究し、また中国史学¹²に詳しい人物で、郷里で塾を開いていたが、日清戦争の後、中国の前途には大変動があると考え、主人公の二人をイギリスへ留学させた。出発に際して、彼は二人に康有為の『長興学記』¹³を一部ずつ与えた。また、旅の途中、彼らは上海で譚嗣同に会い、譚が書き上げたばかりの『仁学』を筆写し、それらの本から多大な影響を受けたという。渡英後の二人は、オックスフォード大学に合格し、黄は政治・法律・経済などを学び、李は格致（自然科学）と哲学を専攻した。梁はこの大学が軍事教育にも力を入れているという設定をほどこし、李は性格的にそれに向いた人物として大学で少尉になったことにしている。イギリスで二人はともに三年の課程を終えた後、李はフランスのバリ大学、黄はドイツのベルリン大学に入りさらに一年半勉強する。李のフランスでの勉強内容は明示されていないが、黄はドイツで国家学、社会主義と経済競争の形勢を勉強する。またこの物語の回想役の孔弘道（字は覚民）は、孔子の子孫で、全国教育会会長、文学大学士と設定されている。

ここでは、維新の成功に重要な役割を果たす二人の主人公の学問習得のプロセスに注目したい。彼らは20歳前後（イギリスへ留学する時点で、黄は22歳、李去は21歳）まで「陸王理学」、「中国史学」、康有為の『長興学記』、譚嗣同の『仁学』といった中国の学問に専念する。¹⁴これだけでは中国を救えないので、加えてイギリスを軸にして、ドイツ、フランスの西洋学が必須になってくる。とくに黄への役割分担から彼の知的人格形成が梁の理想的モデルであることが分かる。また、黄がイギリスで経済を学び、ドイツで経済競争の形勢に感ずるところがあったという設定は、梁が近代社会の動向をよく把握していた証拠である。

また黄と李の二人は当時の新知識人のシンボルとしての役割をも担わされている。近代化の波に晒されるなか、知識人が救国を図るには、まず自分自身を新しくしなければいけない。すなわち、「新民」を創出するまえに、リーダー役の知識人が自らを改める必要がある。科挙試験に備える従来の学問は現実の中国を救うことができないという認識に立って、伝統学問を見直して再解釈し、その上で、西洋近代思想を取り入れなければならない。知識人が学問のために学問をするのではなく、経世のために学問をするという梁の考え方がここによく表れていると思われる。近代になって経世の具体的内容が変化したので、学問内容もそれにしたがって変えなければいけないのである。梁啓超は常にこうして現実に目を向け、現実の状況に応じた具体的対策を構想しており、しかも、この精神をあらゆる政治活動において貫いている。

さらに主人公の二人は当時中国社会に存在していた二大勢力を代表してい

る。黄克強は、康有為をはじめとする光緒帝を擁護し立憲君主制の設立を目指す保皇党を代表し、その名前には、島田虔次の注釈によれば、黄帝の子孫が克く自強する意味を寓した。¹⁵李去病は、彼自分が「西洋医学の医者が病原菌を退治する方法で、きれいさっぱり削り取らざることをせず、中国はのちのち住めるようにはならない」と述べているように、孫文を代表とする革命派を指していると考えられる。ここではさらに、梁が設定した主人公二人の関係にも注目すべきだと思われる。第三回の二人の議論の終わりに、梁は回想役の孔覚民の口を借りて二人の理想的交友関係を述べている。

二人が公のことをこう激しく言い争うが、私情においては依然として互いに親愛しあい、意見の相違によって仲が傷つけられるようなことは少しもない……最近の小学校では……彼ら二人の友情を述べて、児童に交友の模範を教えているのであります。諸君がもしこの二傑を崇拜しようと思うなら、どうかこういうところからじっくり崇拜していただきたい。手本としていていただきたい。そうすれば、わが中国の前途も、きっと日進月歩なのであります。

この時期の梁啓超が改良か、革命かを論じる際、主人公の二人が、正反対の政見を持ちながら親密な友情を保ち、さらにこの友情は模範すべきものだとしている事実は、現実政治を展開する上で深い意味を持っていると思われる。これは兆民が『三酔人経綸問答』に登場させた三人にこれといった関係を設定していないのと対照的であるが、この問題についてはまたこれからの課題としたい。

5. 2 平和的手段

梁啓超は平和的手段による漸進的な改革を目指していた。例えば、この小説のなかには憲政党の綱領を示す「第四節：…万やむを得ない時でない限り、急激激烈な手段を安易には使わない」という表現がある。あるいは、第三回の最後で、黄が二人の議論を「結論」としてまとめるとき、「全国の志士と連絡し、全国の国民を訓練し、事をなすときが来たならば、臨機応変にやるしかないのであって、ただ、万やむを得ざる場合のほかは、決して軽々しく暴力の道には進まない」と述べている。このように、彼は武力による解決手段をとらないことを何回も強調している。

そこで、このような維新を成功させるために、梁啓超が仮想した具体的な平和手段とは、憲政党の拡大発展による上からの自発的権利移譲である。小説の

この部分を見てみよう。

党は上海で創設され、本部をおいた。成立初期、百数十人に過ぎなかったが、皆が熱心に運動し、前にあった各種の会党の合流によって、3、4年の間に各省の省政府所在地と海外各国のうち中国の移民のいる所にすべて支部ができ、州、県、市鎮、村落や海外の商業地、みな小支部ができた。合計、支部が28箇所、小支部が1万2000余箇所のにほる。広東自治時代になると、憲政党の黨員数は1千400万人あまりに達し、広東省だけで400万人あまりいて、その他の各省で合計900万あまりいた。それゆえ、皆が声を合わせてひとたび訴えれば、天子は感動せられ、権力を持つ大臣や奸臣どもは落魄し、広東自治の憲法が簡単に手に入るに至った。各省もそれに続き、その結果、やっと今日のような局面をつくりあげた（第二回、孔覚民による回想、下線は引用者による）。

前の引用にもあるが、梁は、前皇帝は英明で、よく時勢を洞察し、群議を排除し政權を民に譲ったと記している。彼はここで中国の理想的政治規範である堯舜的禪讓を現代的様式で実現しようとしたのではなかろうか。「皆が声を合わせてひとたび訴えれば、天子は感動せられ…広東自治の憲法が簡単に手に入るに至った」というように、梁はルソーの社会契約論的主權思想を中国で応用することを理想としていた。つまり、一定の実力を積み、自治能力を身につけた人民に、君主が喜んで主權を譲るという理想である。梁がここでいう人民とは、彼が『新民説』で説く「新民」のことであろう。西洋近代思想を多く吸収・消化したとはいえ、ベースとして身に付けた儒学の政治思想を中国の近代化に不可欠のものと梁啓超は見ているように思われる。それはこの小説の二人の主人公がともに儒学を基礎としてしっかりと身につけた人物という設定からも分かる。

そのうえで平和的に維新を図るべき理由を、梁啓超は二人の主人公の議論というかたちで提示していく。以下に、そのポイントを纏めてみる。

李去病は武力で清政府を倒すべきだと主張する。中国は古くから革命の伝統を持ち、今自分が主張する革命は、昔のように暴力をもって暴虐を変えるのではなく、仁をもって暴虐を変えることである。つまり、民主制というもっとよい政体をもって今の政体に替えるというのである。この主張は「物競天択」の原理に依拠している。加えて、イギリスと日本を例にし、「もし国会や尊王討幕など長い革命運動を経なかったとすれば今日があるわけではない、彼らは自分でこれは無流血革命だと言うが、実はこれは流血がなかったわけではなく、フ

ランスより少なかっただけである」といい、流血なしに文明を手に入れることはできないとして、フランス大革命を見習うべきだと主張する。

これに対して黄克強は次のように反駁する。「われわれ中国人が中国のことをなすのだから、ただ単に外国の前例を見てそのままこちらへ移してあげればいいというわけにはいかない。中国伝来の特質を詳しく研究し、われわれの国体がどのようなものかを見定め、そのうえで病状に応じて投薬しなければならない」。黄によれば、自国の現状を見ずに外国の前例をまねることが極めて危険なことである。そこで、彼は以下の五つの理由を挙げて李を反駁している。まず、古くからの易姓革命はよくないことだから避けるべきこと。次に、「天下のことは、理想と現実が往々にして相反するものである」といい、フランス大革命の結果と初志が食い違っていることや、フランス人は18世紀末に君主を憎み打倒したが、10数年後にまたナポレオンを皇帝の座に坐らせたことなどを例に挙げて自論を展開する。三つ目は、武力による革命をすれば、被害が多く罪のない民にまで及ぶ恐れがあるので、出来るだけ避けるべきである。四つ目の理由は、とくに、中国の民徳、民智、民力が依然として低いため、革命をいう資格さえもないことを強調している。また「中国人の性格とアメリカの国民の性格とは甚だ違っている」から、アメリカを真似てもアメリカが得られたような結果は得られないだろう。「国民に自治の能力がまだ少しも身に付いていないときには民権を論じることさえできない。このような状態で破壊的な革命を起せば、結果はフランス大革命より悲惨なことになる」。これを解決するには国民教育を行なうしかない。民徳、民智、民力が発達すれば、革命をせずとも自然に主権が手に入るし、専制政体も解体できる。黄はこれを「無血の破壊」と言っている。最後の理由として挙げられているのは、これは彼の最も危惧するところでもあるが、「中国に革命が起きれば、西洋列強が一気に侵入してきて」、中国がたちまち分割されてしまうのではないかという懸念である。「今は弱肉強食の世界で、西洋各国が中国を争っていることも経済競争に原因がある」、中国の状況は全世界の経済と関わっているので、列強の経済や利益に悪影響を与える革命が起きれば各国は文明国のルールに従って行動しないはずはない。そこで、彼は「やはり平和の自由を愛し、秩序ある平等を愛する」とその主張を重ねて言明する。そして、最後に回想役の孔老先生に「これは当時もっとも扱いにくかった問題であります。毅伯先生一派の人が、敢てでたらめに激烈な言葉を言おうとしなかったのは、正にこのためなのです」と、彼の危惧するところを言わせて強調している。

しかし、梁啓超が李の口を借りて「流血なくして文明を手に入れることはできない」と言い、黄にも「事をなす時がきたら、臨機応変にやるしかない」と

言わせていることから判断すれば、梁が武力で問題を解決する方法を完全に放棄したとは言えない。ただ、それは最小限に食い止められるべきだというのである。

二人はまた、目指すべき政体と真似るべきモデルについても議論をしている。続いて、その内容も見てみよう。

5.3 専制政体を取るべきか、民主政体を取るべきか

李去病によれば、ルソー、ベンサム の理論は欧州においてはすでに古くなったが、今の中国には向いているという。つまり、ルソー、ミル、ベンサム の「天賦人權」や「主権を多数者の手に」という主張をもとに、李は「専制君主国の実権は君主の手ではなく、大臣の手にある」と専制政体の少数専権を批判するのである。

李の意見に対して黄は、これらの思想家が述べている多数政治は、将来実現する日があるかもしれないが、今のところは有名無実だと、まず李の理論的根拠を批判する。そして中国が今日、民主の境位にむかって一步でも昇ることができれば話はまた別だが、そうでなければやはり天子の座に一人坐らせなければならぬ。もし、イギリスや日本のように国会があり、政党があり、民権があれば、その時にはこの椅子に誰が坐っても同じだと、今の中国ではやはり専制君主制を取らなければならないと主張する。中国数千年来の君権は、あまりに度が過ぎていたが、今日まさにそれが役に立つのであり、それを最後の王手にすることができる。黄はこのように具体策を述べている。「もし一人の聖主と何人かの名臣がいて、干渉政策を用い、民間の事業をきちんと整頓し、一つ一つ発達するように取り仕切っていけば、これこそ労が半ばにして効は倍するものではなからうか。10年、20年過ぎたら民智既に開き、民力既に充実になったら、自然に多数政治になれる」、「これはある意味で理想であるが、今の皇帝は仁慈英明で、望みなどないとは言えない」というような言葉から判断すれば、彼は清朝政府にある種の幻想を抱いていたように見える。梁啓超は『新民説』において政府に特別な役割を設定している。帝国主義の侵略による滅亡の危機を切りぬけるには、「民を新たにすることによって「われわれの民族主義を實行」し、独立自治の「完備した政府」を組織せねばならない。そこで、「新民」の創出をまって「国家」は形成されるのだが、そのプロセスにおいて「政府」（朝廷）を介在させるならば、近代化の進度の差を度外視した文明諸国との関係を結ぶことができるのである。国家としての中国は新民の形成を待ってしか創設できないにしても、今の政府で列強と国際的に交際していけることになる。¹⁶

李去病の主張する「天賦人權」について、黄克強は「天下の人種は、自ら天然不平等の性質をもっている。人を治めるほうが少なく、治められるほうが多い」、世の中は弱肉強食の世界であるとあっさり李を否定する。黄が言うには、政治進化には一定の段階があり、現在の西欧のよいところはよいが、自国の現状を見ずにそれをそのままもってくることは危ないという。

政治的進化という考え方と民主共和制を最高の政治形態と見なす主張は、黄と兆民の洋学紳士君の共通点である。紳士君が現実をあまり見ない理想家であるのとは対照的に、黄は民主制の論理的優越性は認めるが、現実に合わせていなければそれは無用の長物だと言い切る現実重視の傾向が強い。

梁啓超は黄克強の口を借りて、今日の中国の問題を解決するにはフランス革命を真似ることはできないと述べているが、フランス革命そのものを完全に否定しているわけではない。梁は師の康有為に対し、この問題について次のように述べている。

而して先生しばしば法国大革命を引きて鑑となす。法国革命の惨は、弟子深くこれを知る、日本人これを忌みこれを悪むこと尤も甚だし。然りとはいえども此れはもって中国を律する援くるにたらざるなり。中国と法国は民情もつとも相反す、法国の民は最も動を好み、一時としてよく静なることなし。中国の民は最も静を好み、千年を経て動かす。故に路駱諸賢の論、これを法国に施さば、誠に取乱の具となり、而してこれを中国に施さば、適に興治の機となる。¹⁷

梁がフランス革命を評価するのは、それが新しい時代を切り開き、ヨーロッパを「人群進化の第二期」に導き入れた歴史的貢献においてである。このフランス革命に対する評価は、歴史的意義は認めても現在の中国に必要な処方ではないとする点で、ルソーに対する評価とも対応している。梁啓超は兆民を通してルソー思想に触れ、自由思想の影響を受けたことがすでに多く指摘されている。彼は「ルソー学案」¹⁸において、ルソーを「政治学のために新天地を開いてくれた」最大の思想家として評価している。また「専制」に対する『民約論』の非妥協的批判、「道徳の本」としての「自由」の不可譲性に共感を示し、『民約論』をフランス革命、ひいては世界の民主主義革命の原点に位置づけていることも確かである。しかし、この書の内容を紹介するにあたって、梁は「立国の事実」と「立国の理義」が別のことであると主張し、ルソーの民約の真意は立国の理論にあると自分の視点をはっきり打ち出していることを見逃してはならない。

フランス革命とルソーに対する梁のこのような冷静な認識は彼のルソー受容の師でもある兆民にも認められる。兆民はフランス革命後の政界の激動を十分に承知していた。つまり、ルソー主義やフランス革命が、直ちに安定的な近代国家をもたらさないことをかなり冷静に捉えていた。「共和の字面に恍惚意を鋭して必ず昔年仏國の為せし所を為して以て本邦の政体を改正する有らんと欲する者」について、彼は次のような警告を発している。「其迷謬固より不学寡聞の致す所にして未だ深く咎むるに足らずと雖も、今にして其惑を弁ぜずんば啻に莠苗淆乱大に我儕自由の暢路を妨碍するのみならず、亦た恐らくは蠹毒侵蝕暗に国家元氣の幾分を戕賊する有らん」。¹⁹「共和政治」という名称や形態に心を奪われるよりは、「君民共治」でよいから内容を充実させるほうを選ぶべきだと兆民は主張していた。

したがって、『三酔人経綸問答』では、南海先生の主張が専制政治から立憲政治に進み、さらに民主・共和の政治に到達するという西欧的政治発展の法則性をつかんでいる。しかし、彼の政治論は、人民主権論や共和制の主張からはかなりの距離があり、立憲制度を設け、革命的行動を戒め、啓蒙と漸進主義に希望を託している。さらに彼が国民の意向に従い、国民の知的水準にちょうど見合う平穏な楽しみを維持させ、福祉の利益を得させることが政治の本質だと述べている点が、梁啓超と似ている部分である。南海先生にとって、民はやはり東洋的政治伝統の中での治める対象としての民であり、二人が直面している現実問題は違っていても、東洋にはまだ、政治的な人民が存在しないという現実認識は共通している。

5. 4 どのモデルを取るべきか

具体的なモデルとなりうるのは、イギリスとドイツ、さらに日本ということになる。梁の進歩史観によれば、「天演界の公例」としてアングロサクソンが最高位に位置し、ドイツさらに日本はそれを追うものである。また日本はドイツとともに、民権と君主制の理想的な関係、すなわち「民権を伸ばすことにより君権を護る」という成果を目の当たりに示した学ぶべきモデルである。それに日本はイギリスとともに、「天地の間、第一の奇福を享受する」君主国なのであって、わが聖主もそれにあやかるべきなのである。このように、梁にとってやはりもっとも手近にあったモデルといえば、「君国一体」の東洋の国、日本なのであった。

梁啓超は「論學術之勢力左右世界」で、ルソーに続いてアダム・スミスを取り上げ、「1846年以後、英國の自由貿易政策Free tradeを執行し、尽く関税を免じて、以て今日商務の繁盛を致すは、スミス原富の論、これをなす」と、『国富

論』が19世紀イギリスの繁栄、さらには世界経済の原点となったことを指摘している。また『新民説』では「スミス、旧生計学を破壊して、新生計学を興し、ルソー、旧政治学を破壊して、新政治学を興す」²⁰と述べ、スミスをルソーと同等に重視することを明らかにしている。梁はスミスに導かれ、中国に適する経済論を模索し始めたのである。彼はイギリスの理想的繁栄を眺めながら、身近にある日本の維新からわずか30年後の発展ぶりを仔細に観察した。その結果が、彼のこの新しい中国像に大きく関与していたと思われる。

兆民が『三酔人経綸問答』で議論させた日本の進路問題も、近代社会のプロセスを踏みながらの発想である。この書では、彼が経済に直接触れているところは少ないものの、後に『東雲新聞』に「第十九世紀政治の付属品は経済なり。付属品というよりは寧ろ必需品なり」²¹と述べているように、兆民は、西洋諸国が産業革命を経過することによって急速に経済力を高め、経済が既に政治と大きく関わってきたことを十分に意識していた。また「我日本の経済社会は最早四方環海の内に限られずして、滔々汨々たる欧米財利の大波瀾中に渦巻き込まれ、一滴の痕跡をも留めずして地球上看客の眼界より消滅し去らんとす」²²と記し、日本が先進諸国を中心とする商業圏のなかに巻き込まれ、その搾取の対象となりつつあったことについて警鐘を鳴らしている。

小説中の議論の進め方については、『三酔人経綸問答』では三人の意見がかなり並行線を辿るのと対照的に、『新中国未来記』では、二人が互いに相手の議論をふまえて、その先の議論を展開している。このように、議論によって国の進むべき政治的方向を調整するというやり方は、兆民と違う出発点をもつ梁が、日本や西洋諸国の議会の実態を参照して学んだ方法でもあるように見える。

まとめ

日本に亡命した梁啓超は大量の日本語文献を通して西洋思想に触れ、それを吸収した。彼は自分の儒学を礎にこれらの思想を加えて、中国を西洋列強主義の侵略から脱出させ、近代国家の創出を図った。ここで梁は近代社会存立の文脈をつかむことができた。つまり、近代社会では経済的な要素が最も重要なポイントとなり、したがって政治活動も従来通りのやり方ではすでに通用しなくなり、これに合わせて変えなければならないのである。国家の経済を発展させるには、安定した社会情勢が必須な条件であり、そこで初期段階では皇帝が必要なのである。したがって、教育を通して人民の徳、智、力を養成しながら経済を発展させ、人民の実力が付いてきたら、今度は皇帝も喜んで権力を人民に

譲る。こうして政治システムも自然に専制から民主に移行することができる。ここで梁啓超はまさに中国の理想的政治規範とルソーの社会契約論的主権思想をうまく結婚させていると言えよう。²³

梁にとって、この小説はあくまで自分の政治活動を展開させるための宣伝であったかもしれないが、当時の人々に中国の現実を認識させ、この現実から抜け出す一つの可能性を提示したという啓蒙的な意味は大きかったと思われる。

後に梁啓超は『新民叢報』を通して『民報』と長く論争を展開したが、ここでの意見の対立が孫文ら革命派の理論を完成させるのに大きく貢献したといえる。もちろん、その時彼は康有為を代表とする立憲党の陣営に立って、立憲党の保全を図ったつもりだった。だが、その一方で彼は党派を超越した意識的な論争を目論んでいたと思われる。その意図については、『新中国未来記』にすでにその糸口が現われている。例えば、第三回の議論の終わりに、李去病はこう述べている。

「君主立憲は折中調和の政策である。凡そ天下の事、必ず反対意見を持つ党があるべきだ。双方の力量が互角で、議論し競争をしたら、必ず折中調和に至ることができる。もし一方が絶対の権威を持ち、一方がわずかな力しか持っていないければ、到底調和には至れない。故に弟が思うには、われわれ将来の目的が共和であれ、立憲であれ、革命についての議論は現時の中国には欠くべからざるものである」（第三回、駁論43）。

このように、近代になって東アジアの国が西洋世界のメカニズムに巻き込まれるに従い、変革を求める政治の方法も変化する可能性を示している。梁啓超の『新中国未来記』と兆民の『三酔人経綸問答』が、ともに違った意見を持つ主人公に議論させる²⁴かたちで創作されたのは恐らくこういった原因も考えられるだろう。そしてこれらの意見のどれを選択するかによって、一国のその後の思想、文化形成に大きな影響を及ぼす時代だったのである。

注

- 1 宮村治雄「梁啓超の西洋思想家論—その「東学」との関連において」を参照。
- 2 同上。p 255.
- 3 第一回と第二回は1902年10月15日発行の『新小説』創刊号に掲載され、第

三回は第二号（同年11月15日）、第四回は第三号（同年12月15日）にそれぞれ掲載されている。第四回までは順調に進行したが、第五回は半年以上経過した後の第七号（1903年7月15日）に掲載された。第五回が梁の作ではないことについて、余立新が「《新中国未来記》第五回不是出自梁啓超之手」（1997年『古籍研究』第2期）で挙げた5つの根拠がほぼ定説になっている。

- 4 この年の号は少し複雑なので、下に纏めておく。
- | 西暦 | この小説での西暦 | 孔子紀元 | 注 |
|------|----------|------|-----------|
| 1902 | 2002 | 2453 | 小説が発表される年 |
| 1912 | 2012 | 2463 | 維新成功 |
| 1962 | 2062 | 2513 | 維新50年大祝典 |
- 5 鮮卑民族にして北中国を支配した北魏の孝文帝が華化政策を取り、姓を中国風に改めたことを指す。
- 6 島田虔次訳「新中国未来記」や山田敬山「『新中国未来記』をめぐって—梁啓超における革命と変革の論理—」において、この名前の意味を説明している。
- 7 山田敬山「『新中国未来記』をめぐって—梁啓超における革命と変革の論理—」p341を参照。狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』、みすず書房、1999年所収。
- 8 梁は孔覚民にこう回想させている。「維新以後、わが国の三大政党、つまり国権党、愛国自治党、自由党が常に国の政治上の権力を握って、今日に至りました。この三つの党名は、聴衆諸君はすっかりおなじみに違いありません。あるものが中央政府の勢力を主張し（すなわち国権党）、あるものは地方自治の権利を主張し（すなわち愛国自治党）、あるものは民間の個人の幸福を主張する（すなわち自由党）など、その目的はそれぞれ異なり、いつもお互いに反対しあって、激しく論争してはいるけれど、しかしこの三大政党の首領および創始者は、すべて以前の立憲期成党の党員であります。」
- 9 「本来学説の沿革とは関係ないが、わが国の人々は今尚この学問の重要であることを知らないで、それと国種存滅との関係を明らかにした……今日は全世界が開明に赴く時である。それゆえ凡そ国を天地に立てるものは、すべて国富を増殖することを第一の要務とし、日々無形の競争を演じて市場で闘う。事を好むわけではない、勢いがそうさせるのだ。」『飲冰室文集類編』、下編、p209～212。
- 10 「惟經濟二字。襲用日本。終覺不安。以此名中国太通行、易混学者之目。

- 而謂其確切當於西文原義、鄙意究未敢附和也。」(『新民叢報』第8号、「問答」。1902. 5. 22。『壬寅新民叢報彙編』、p 868に所収。この言葉をめぐる詳しい考察はまた別稿を用意している。
- 11 陸象山、王陽明の理学であり、宋学風の中国固有の哲学をいう。
 - 12 梁啓超は史学と他の学問との関係に注意を払っている。諸学を貫く「公理公例」は、直接あるいは間接に史学に裨益するからである。井波陵一の「啓蒙の行方—梁啓超の評価について」を参照。狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』、みすず書房、1999年所収。
 - 13 康有為が長興里での教育内容を纏めたものである。この書は、梁啓超らに講学をはじめた光緒17年(1891年)の夏に万木草堂より刊行されたもので、康有為は、冒頭に師の朱九江の為学方針を祖述するといひ、学問の意義、人間に学問の必要な理由、講学実施への決意などを述べ、続いて自己の学問の内容を『論語』述而篇の「志於道、拠於徳、依於仁、游於芸」の四句にならひ、同句の四項目に分けて説明する。おおむね漢学と宋学の折中で、孔子の言を典拠とするが、さらに古代の技術学ともいえる「六芸の学」と現在に必要な「科挙の学」の二項目を補っている。
 - 14 梁啓超の中国学問の取捨については、稿を改めて詳しく考察したい。
 - 15 島田虔次訳「新中国未来記」p 236を参照。『清末民国初政治評論集』、平凡社。1971年所収。
 - 16 狭間直樹「『新民説』略論」p 88を参照。狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』、みすず書房、1999年所収。
 - 17 『梁啓超年譜長編』、p 235。
 - 18 『新民叢報』、11号、1902年。『飲氷氏文集類編』下、学説、p 125。
 - 19 中江兆民、「東洋自由新聞」、明治14年3月24日。
 - 20 『新民叢報』、10、11号。1902年。『飲氷氏文集類編』上、p 165。
 - 21 中江兆民、『東雲新聞』、明治21年10月4日。
 - 22 中江兆民、『四民之日暉』、p 25。
 - 23 「思うに大地には今日二つの文明が存在するに過ぎない。一つは泰西文明で、欧米がそれである。一つは泰東文明で、中華がそれである。20世紀は両文明が結婚する時代である。……かの西方の美人は、必ず我が家のために優れた子供を産んで、わが一族を盛んにしてくれるだろう」。『飲氷室文集類編』、「中国學術思想變遷の大勢を論ず」p 11。
 - 24 ここでいう議論は、従来の問答、あるいは知識人が学問をする際に行なってきた議論とは異質なものと考えられるが、その具体的な考察はまたこれからの課題としたい。

参考文献

- 中江兆民『三酔人経綸問答』、岩波文庫、1965年。
- 西順蔵、島田虔次編『清末民国初政治評論集』、平凡社、1971年。
- 宮村治雄『開国経験の思想史 兆民と時代精神』、東京大学出版会、1996年。
- 狭間直樹編『共同研究梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』、みすず書房、1999年。
- 梁啓超『飲冰室文集類編』、『壬寅新民叢報彙編』、国会国立図書館データベース
- 土方和雄『中江兆民 近代日本の思想家』、東京大学出版会、1958年。
- 米原謙『兆民とその時代』、昭和堂、1989年。